

にんげん

身から出たもの 1

10月18日の朝、やっぱり出ない。この一週間、軟便常習のわたしがありえないような便秘になり、この二日ばかりはどんなにいきんでもまったく出なくなっていました。そこで昨夜、生まれてはじめて市販の便秘薬を飲んで寝たのです。朝食のあとにいつものようにトイレに行きますが、やはりきばってもわずかな便しか出ません。不快感はまったく解消されませんでした。18日は朝から珍しく予約の患者さんがつながっていて、午前中には医者にはいけそうにありません。午後にも2時に予約が入っていて、これからも予約が入るかもしれません。

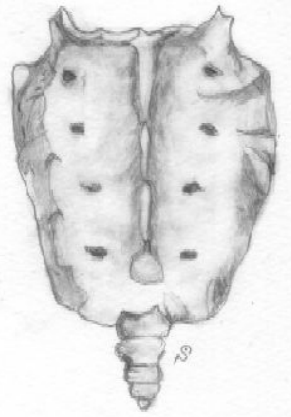
朝食を食べながら、どうしたものか考えていたのですが、心がなにかにつきうごかされ、二人の患者さんにキャンセルの電話をかける気持ちになってきました。どう考えても、この便秘は異常です。便秘に気付いたときから、がんかもしれないという思いが心の隅でしだいに成長しているのを感じていました。二人の患者さんには体調がすぐれないので予約をキャンセルさせて欲しいと伝えました。患者さんからは異口同音で気遣いの言葉をいただき、恐縮と恥ずかしさの混ざった気持ちになりました。しかし、肩から少し力がぬけた感じもしました。朝1番の患者さんの治療を終えたら以前、私たち家族がお世話になったIクリニックに行くことを決めていました。このIクリニックの先生は出身の医科大学

と連携を密にしている、いざという時、頼りになると思ったからです。というのも、今から7年前、お袋が右の乳房になにか触れるとわたしのところに来たことがありました。触診すると、明らかに右乳房の7時の方向に乳癌の疑いのあるシコリを感じました。その時、お袋の行きつけの医院ではなく、Iクリニックを強く勧めたのです。予想どおり、じつに迅速に対応して大学病院に送ってくれました。やはり乳がんでしたが、手術もうまくいって、順調に退院することができたのです。もちろん母は現在も健在です。ところで、わたしは3年前、商店街のなかにあった実家の土地に、住宅兼治療院を建てて引越したため、商店街の中の別の医院を利用するようになっていました。ですからIクリニックには無沙汰をしていたのです。しかし、I先生はいつもの穏やかな笑顔で、まるで旧知の人に会ったように迎えてくれました。I先生は一通りお腹を診察して、お腹もやわらかだから、下剤をだして2、3日様子を見ましようかといわれたのです。わたしとしては不安も大きくなっており、今年60才だし、詳しい検査をして欲しいと率直に頼みました。すると、嫌な顔一つもみせないで、うちは設備がないからと言いながら、机の書類の束をひっくりかえし、連絡名簿のようなものをみていました。そして「タイミングがよかった。ここから近くのO病院知ってますか。



S大学病院の系列の病院で、午前中は今日の木曜日と月2回の土曜日だけ外来をやっている先生が、腸のすごいエキスパートでぼくの昔の同僚だから、いまから連絡してあげる。」と電話してくれたのです。わたしの名前と年齢を伝え、簡単に症状を説明して診察と検査をたのんでくれました。「K先生と言いますから、よろしくね。」そしてメモ用紙に先生の名前だけを書いて、紹介状のかわりにこれを受付に出してくださいと笑顔でおくりだしてくれました。病院に向かう道すがら、ふっと気になりました。K先生の名前に聞き覚えがあったからです。受付で申し込み用紙などを書いてから、小1時間ほどして名前を呼ばれました。診察室のドアをあけると、開口1番「やっぱり〇〇さんでしたか」と、見覚えのある笑顔がむかえてくれました。なんという偶然、K先生は以前住んでいたマンションのお隣さんだったのです。年もはなれていたし、最初は挨拶をかわすくらいのご近所つきあいでした。けれど、とっても感じの良い若いご夫婦で、良い隣人だとかみさんとも話していたものです。まもなく男の子が生まれて、私たちもその成長をほほえましく眺めていました。あるときそのマンションが別のオーナーになり、一方的に家賃の値上げと不利な条件の契約書を送付してきたことがありました。私たちは、そんな条件などはなから拒否するつもりでしたが、Kさんはこのマンションの住人にみんなまで交渉しましょうと呼びかけました。Kさん

たちと私たち家族が中心になり、全世帯の8割を説得して、値上げ拒否の文書を連名で新オーナーに渡しました。結局、実にあっさりと撤回させることができました。そういういきさつがあつて親近感も深まり、そのとき以来、正義感の強い爽やかな好青年だという印象が加わりました。お子さんも大きくなり、わたしたちより先に引越してマンションを出られましたが、5年くらいは隣人だったのです。Kさんが医師らしいということは、なんとなく分かってはいましたがそれ以上知ることはありませんでした。ところが、7年前お袋の乳がんのときにS大学病院で偶然廊下でK医師にお会いしました。その後お袋にもそれとなく声をかけてくれたりと他科にもかかわらず親切にさせていただいていたのです。それから7年、診察室で患者として再会したこの時、直感的に、K先生にこの先お世話になると覚悟したのでした。わたしは運命論者ではないけれど、なにかしら運命的な出会いであることが確信されました。直ぐに血液検査、尿検査、レントゲン、造影剤、CTと矢継ぎ早やに検査され、緊急入院となったのです。S状結腸に狭窄があることがわかりました。すぐに点滴が開始され、いきなり患者になりました。普段正常な血圧が150と100とかなり高く、この事態に頭は冷静のつもりでも、身体は強く反応しているのがわかりました。この半日、あれれあれれ、あれあらよ、の展開でした。しばらくは闘病ライブを緊急掲載します。



かん さつ